

Alert 反天皇制運動 24号

[通巻 406 号]
2018 年
6 月 5 日発行

第 24 期・反天皇制運動連絡会

- 今月の Alert**
- 「元号」「代替わり」準備の本格化 さまざまな抵抗の回路を！——*2
 - 反天ジャーナル ● はじき豆、竹森真紀、先天性ヤジ馬*3
 - 状況批評 ● 天皇制と道徳の教科化——北村小夜*4
 - 映画を観た!! ●『東京オリンピック』『民族の祭典・美の祭典』——蝙蝠*7
 - 紹介 ●『私たちの街の朝鮮学校のこと知っていますか?』——桜井大子*8
 - 太田昌国のみたび夢は夜ひらく(97)
 - 米朝首脳会談を陰で支える文在寅韓国大統領——太田昌国*9
 - マスコミしかけの天皇制(23)
 - 新元号・上皇・「二重化」されつつある権威の抗争?——(壊憲天皇明仁) その21
 - 天野恵一*10
 - 野次馬日誌*11 集会の真相*13 学習会報告*15
 - 反天日誌*16 集会情報*16

拝啓 佐藤文明 さま

ついに戸籍にマイナンバー（個人番号）を紐づける番号利用拡大法案である戸籍法改正案が早ければ秋の臨時国会にも提出されようとしています。文明さんが亡くなって早7年が経ったのです。私は文明さんと「やぶれっ!住基ネット市民行動」で住基ネットを追いかけてきました。残念ながらその後継であるマイナンバー制度が法制化されたのは文明さんの死後2年を経過してからだったので、明晰な分析を聞くことができなかった。多くを語らなかったけど、文明さんの一言は私の思考を大きく超える驚きをいつも与えてくれました。

皮肉なもんですね。私たちは番号問題から再度戸籍問題に漂着してしまった。一部の右翼はこの戸籍のマイナンバー紐づけに反対しています。番号付けによって今の戸籍制度が変わってしまう危険性を嗅ぎ取ったからなのでしょう。

しかし、日本の天皇制? 家父長制? 戸籍制度という構造は天皇の生前退位を前にしても揺るぎないと実感せざるをえません。だから私たちは天皇制の末端を支える戸籍制度を問題にすることで天皇制社会を問えると考えてきました。その最も基本的なパースペクティブを構築したのが文明さんでした。

そもそも現行戸籍システムは市町村ごとにバラバラでいまだに本籍地でないと戸籍謄抄本すら取れない、とても国家一元管理などと言える代物ではありませんでした。それを全国ネットワークシステムにしようという壮大な構想です。マイナンバーがそれに紐づけられたら、私たちの身分関係は初めて国家一元管理と呼べるものに変貌するのです。

マイナンバー制度がこれから拡張していき、真に国民管理システムとして姿を露わにしようとしているいま、文明さんから知恵をもらえない寂しさを乗り越えて私たちは闘うしかないのでしょうか。今も渋谷の行きつけの飲み屋で会議のあとは飲んでいたのでたまには顔を出してくれると嬉しいんだけどなあ。

(宮)



250 円

- 定期購読をお願いします（送料共年間4000円）
- 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net
- 最新情報はこちら ▶ <http://www.ten-no.net/>

今月の

Alert

「元号」・「代替わり」準備の本格化 さまざまな抵抗の回路を！



新天皇「即位」まで一年を切り、「代替わり」に向けた準備が着々と進んでいる。五月十七日、「新元号への円滑な移行に向けた関係省庁連絡会議」（議長＝古谷一之・内閣官房副長官補）は初会合を開き、各省庁の幹部らに對して「新元号の公表時期を改元の一カ月前と想定し、準備を進める」との政府方針が示された。政府は改元日までに準備を終えるのが基本とするが、元号を用いた行政システムの一部では改修が間に合わない見通しであり、将来の改元も見据え、政府はシステム間のやり取りを西暦で統一するよう、関係省庁に中長期的な改修も指示した、と報道されている。

カレンダー業界などは、去年の六月から、最低一年前に発表してくれないと対応できないからと、早期の新元号発表を求めているし、IT業界などからも「一カ月前の公表は危険」「果たして一カ月で間に合うものなのか」などと懸念の声も上がっているという。退位特例法の成立にあたって、「改元に伴って国民生活に支障が生ずることがないように」との、言い訳的な付帯決議がなされていたが、このありさまだ。

あまりに早い新元号の公表は、いまの天皇に「失礼」だとか、「二重権威」が生ずるとか、意味不明の言い草で、当初は今年の夏とも言われていた公表時期をずらすと伸ばし、挙句、元号制度の不便・不合理さを浮き立たせてしまったことは、嘆うべき自滅であったといふべきだが、だから元号制度をやめてしまおうという声は、マスメディアの主流に掲げられることはない。元号そのものは自明の前提としながら、

その「合理的運用」を提言するだけだ。

「皇位継承儀式」に関しても事情は似ている。四月三日、政府は「劍璽等承継の儀」や「即位の礼正殿の儀」など即位関連の五儀式と、新設される「退位礼正殿の儀」を「国事行為」としておこない、「大嘗祭」については宗教的性格を考慮して「国事行為」とはしないものの、公費（宮廷費）を支出するなどの方針を閣議了解した。儀式に使うためのだけの「大嘗宮」の建設など、儀式のためには膨大な費用がかかるための措置だろう。

四月三〇日付東京新聞は社説で、前回の即位・大嘗祭において、政教分離訴訟がおこされたことなどを紹介しながら、「戦前の宗教性は排して」「象徴天皇の代替わりは国民の理解を得つつ、憲法との調和が必要である。政府にはそんな再検討と準備が求められている」と主張している。「代替わり」の「民主化」を求めるものであっても、「代替わり」や天皇制自体に関する批判的な視点はかけられない。これは、「憲法にもとづく国民主権と政教分離の原則にかなった新しい（代替わり）儀式の」やり方をつくりだすべき」であると政府・議会に申し入れた日本共産党の姿勢にも示されている、この国における「リベラル」の天皇問題に関する態度の主流をなすものだ。

（ここで注意しておかなければならないと思われるのは、「戦前回帰の宗教ナショナリズムを抱く人たちに、皇室祭祀が利用される恐れがある」という危機意識に立ちつつ、天皇制をめぐっては、「神聖が象徴か」という問いがある、

「慰霊の旅」などを続ける今上天皇のあり方が、神聖国家回帰に対する防波堤の役割を果たしてきた」と評価する島蘭進らの議論である（四月二日東京新聞・こちら特報部）。これだけならよくある「リベラル」の明仁天皇評価の範囲だが、島蘭はさらに一歩進んで、「民主主義の次元には、宗教的な次元が欠かせない」という論理で、明仁天皇制の論理を正当化するのが。詳述する紙幅はないが、天皇儀礼や「国家神道」「政教分離」というものを考える上で、きわめて危険な議論であると思う。

こうした言論状況の中で、私たちに求められているのは、身分差別と人権侵害の象徴であり、人びとの意識を、日常的に国家的共同性へと包摂・統合する国家の装置としてある君主制度＝象徴天皇制を拒否するという立場から、状況にどのように介入していく言説を運動的に作り出していくかということであり続けている。

しかしすでに、この間、反天連も呼びかけ団体の一つに加わって展開されている「元号はいらない署名運動」、首都圏や各地で始まっているさまざまな天皇制反対の動きとその連携、また、即位・大嘗祭を違憲訴訟で問うていくという動き、そしてまだ私たちの知らない具体的な回路はいくつも出てきているはずだ。元号はいらない署名運動では、七月二日に集会も準備している（三時一五分開場、文京区民センター）。行動し、つながりあい、議論していく。

（北野登）

改元大迷惑問題に思う

どうやら新元号の公表は改元一か月前になるらしい。まことに大迷惑だ。こういう迷惑感が今回ばかりでなく広く共有されている気がする。そういえば前回はどうだったろうか。そもそも前回の改元は昭和天皇の死去に伴うものだったから、事前に新元号を公表できないという事情があった。だから急な改元で（おそらく今回よりも）改元に伴う対応は大変だっただろうが、まあ「仕方ない」と思うしかなかった。だが今回は違う。そもそも突然の死去による代替わりに伴う混乱を避けたことから代替わりを「事前告知」する、というのが生前退位の趣旨の一つだったのではなからうか。そう考えると今回の新元号の公表の途方もない遅さは、いわば天皇のありがたき「思いやり」を台無しにするものといえよう。誰が新元号の公表時期を実質的に決めたのかは知らんが、率直に言って市民をナメていると思う。そもそも西暦と元号の併用は非常にめんどくさい。政府ですらデータ管理を西暦に一元化すると言い出す始末である。ただ、「元号」に対する生活に根差した「迷惑感」と「天皇制廃止」との距離はまだ大きい。改元問題をその距離を埋めるきっかけにできるかどうか、反天皇制運動も試されていると思う。

(はしき豆)

前号「Alert」状況批評を読むべし

前号の佐野通夫さんの論稿に大きく頷き、それを引用しつつ、一言。

福岡朝鮮初級学校は3歳児からの幼稚園児と小学生併せても50名ほど、数からすれば僅かな子どもたちだ。

福岡市はその彼らの教育を受ける権利を保障しないどころか、わずかばかりの補助金すら打ち切った。『……補助金停止問題は、朝鮮人を当たり前の隣人、同じ社会の構成員として見る感性をも奪っていく』福岡市教育委員会は、「公立・私立に関わりなく福岡市の同じ子どもとして、分け隔てなく支援している」との詭弁を繰り返し、「一条校（公立学校）に來れば、教育の機会を保障してる。受け入れを拒否しているわけではない」としゃあしやあと述べた。

『残念ながら、日本における朝鮮、朝鮮学校をめぐると言説は、「在特会」のヘイトスピーチと変わることはなかった』『在特会』からの監査請求を受け補助金を打ち切った福岡市そのものだ。国家に追隨する役人は、迫害され、弾圧され、人間性を否定されたものの痛みを知らずともせず、自分がなにものであるかを追い求めることこそが、真の学びであることを知らない。『……朝鮮学校は国家の意思で作られたのではなく、在日朝鮮人の意志によって作られた学校なので』あり、公教育とは決して相容れないのであり、だからこそ日本政府は弾圧を続ける。（排外主義にNOー福岡竹森貞紀）

第2次日大闘争？

またぞろ「68年」話がうるさい。研究されるほどに、土の中に体が埋められた気分になる。俺たちは「頭数」なのか？「最大の学生集会は1968年11月東大安田講堂前で2万人、ベ平連は翌年6月の5万人だ。2017年反原発17万人、2015年反安保法制10万人と比べて、68年は数量にみあわない過大評価がされる。エリート大学が中心だった」（小熊英二）。

「人間を生きたまま埋める」言葉だ。映画作家の原一男は言う。「新宿騒乱の夜。ノンポリの学生たち、野次馬に混じって私もその時、歌舞伎町にいた。『自然発生的』にデモの隊列ができた。生まれて初めて見知らぬ同世代とガッツリ腕組み、ザッザッザッとうねるように進むリズム感。快感だった」。そして彼は「投石できない自分」を見つめて映像の世界に向かう。歌舞伎町のヤジ馬など「頭数」に入らないってか。

と思ったら、第2次日大闘争が始まった!? 日大アメフト部監督が対戦相手にケガを負わせると選手に強制する「襲撃命令」を出す。断れなかった20歳が指示を認め、監督の責任を証言した。元日大生共闘たちは「自分たちを襲った体育会」の伝統をこの事態に見る。スポーツ界の圧力はハシパない。「翻身」した彼は「抗えなかった自分」を見つめて生きるだろう。こんな泥に塗れてノンポリやヤジ馬が立ち上がったのが日大闘争でしょ。（先天性ヤジ馬）

反

天



ジャーナル

状況批評

思想・状況・批評

天皇制と道徳の教科化

北村小夜（元教員）

■やっぱり「おことば」は「勅語」だった

小学校で執拗に教えられたので決して忘れることはない。天皇が国民に言った「ことば」が勅語で、書いたものは詔書と。

二〇一六年七月一日、NHKのスクープに始まり、八月八日には「ビデオメッセージ」（おことば）が流れて、退位の意向が示されると、七〇年経っても主権在民が身に付かない国民の支持に押されると、無法は無視され、政治が実現に向かっていった。こんなことができるのは大日本帝国憲法下の天皇ではない。まさに「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」ではないか。

二〇一八年四月から小学校で、道徳が教科化された。二〇〇六年改悪教育基本法の「伝統文化を尊重し、わが国と郷土を愛する……」を掲げ、二二の徳目ごとに教材で具体化した検定教科書による授業が始まっている。教科化に対しては教育勅語・修身の復活と言って、一九五八年の導入以来六〇年にわたって反対してきた。私たちが使った第三期国定教科書修身の一年生の初めは、「テンノウヘイカバンザイ」であった。当時に比べれば天皇・皇族は身近にある。よく歩き回り、新聞やテレビに現れない日はない。歩き回った跡には碑や看板ができる。興味本位な情報もあふれている。自民党憲法改正草案には元首化を目指している。いまこの国で生き方を学ぶには天皇制については真剣に議論しなければならない。しかし、道徳教科書は天皇や元号に全く触れていない。大抵の教材は背景に置くことくらいは容易に見える。書く条件は揃っているのに書かないのはきちんと書くのは憚られ、中途半端に書けば、左右からの攻撃を受けることを恐れているからであろう。私たちも天皇・国旗・国歌などの記述は少ない方

が良いという消極的な対応しかできていないのが現実であるが、次回からは本性が現れるだろうし、道徳の性根が明らかになったのだから、覚悟してからなければなるまい。

■付度

政権の不祥事が次々に続き、内閣支持率は下落するのに、野党の支持率は上がらない。不祥事を起こすのは税務省などの官僚機構であるが、そこには安倍総理への付度がある。森友学園問題——国有地が森友学園に破格の安値で払い下げられたこと、さらに財務省が関係文書を改ざんした事件でも官僚たちが首相意向を付度してのことであることは明らかである。官僚たちの違法行為も辞さない付度が、一人の人間を自殺に追い込んでいる。国家に違法行為を強いられて自殺したということは、犯罪国家に個人が従わされるといふ全体国家状況が作り出されているということである。この国では、もう安倍の意向を付度することが、安倍政権統治下での基本ルールになってしまっている。

道徳の教科化こそその最たるものの一つではないか。

二〇一八年四月から小学校において実施されている道徳の教科化は、教育勅語の復活と言われているように、国家による価値観（愛国心）の押しつけという大きな問題であるけれど、世間はすんなり受け入れてしまっているという大問題である。教科化によって評価が行われることになり、個人の道徳性について学校と言う公的機関が判断するわけだから「大問題」である。新たに教科書が作られ、文科省による検定、教育委員会による採択をへて、児童に配布されている。その検定過程は女性週刊誌にも載り、

文科省の指示に従って、教科書会社が、パン屋を和菓子屋に、アスレチックを和菓子屋に変更したように巷の話題にもなり「伝統文化や愛国心を教えるのに和菓子屋・和菓子器にすぎるとは情けない」と揶揄されたりしたが、文科省は「『伝統文化の尊重、国や郷土を愛する態度』の扱いが不適切」という意見を述べただけで、変更はもっぱら教科書出版会社の「付度」「自主規制」によるものであった。教科書は商品である。商品になるためには検定に合格しなければならない。商品は売れなければならない。売れるには教育委員会に採択されなければならない（教師の採択権は無償化と引き換えに奪われている）。教科書出版会社は二〇〇四年のN社の倒産を忘れない。かつて多くの学校で使用されていたN社版歴史教科書は「新しい歴史教科書を作る会」などの跋扈の中でも、「従軍慰安婦」も「侵略の歴史」もきちんと記述し続けた。結果、検定は通り現場の期待は高かったが、「自虐」攻撃を受け、混乱を恐れる教育委員会に全く採択されず倒産に陥った。こうして教科書は政権の思うままになってきた。

小学校道徳教科書は戦後初めての道徳教科書の検定ということもあって、不合格を恐れて八社とも自社の特性を出すことなく必要以上に学習指導要領・解説の意を尊重に付度した結果、どれも似たり寄ったり、二二の徳目は修身を彷彿とさせる。予想された育鵬社が出さなかったが、育鵬社から流れてきたメンバーが加わった教育出版社が代わりを果たしている。国旗・国歌を異常に大きく扱い、オリンピックで使われる旗・歌が、国旗・国歌に限られているように書き、君が代斉唱時の起立・礼の行動を写真入りで説明したり、安倍を含む政治家の写真をも必然性もなく取り上げたりで問題が多く採択の争点になったが、採択冊数は五七万一千三八冊、割合では八・六パーセントである。五七万人の子どもが学ぶわけである。その問題の教育出版社であるが、六年生用にアイヌについての記述がある。全教科書六六冊の中でただ一篇なので、とりあえずよくぞと思う。「アイヌのほこり」と題して「アイヌとは、遠い昔から北海道を中心とした地域にもともと住んでいた人たちのことです。明治時代以降、アイヌは、住む土地をうばわれるなど厳しい差別をうけてきました」と前置きも。内容として

は伝統文化を伝える活動をしている宇佐照代さんを紹介するものである。これについて北海道教組は、政府のアイヌモシリ侵略・植民地主義などを不問に付し、アイヌ復権を文化面だけに留めていることは、新たな同化主義に陥る危険があるのではないかと指摘している。

いま（二〇一六年六月）、来年度から使用される中学校の道徳教科書展示会が開かれている。小学校同様八社が参入している。

■教科化に至る経過を紐解くと

第一次安倍政権（二〇〇六年九月から二〇〇七年八月）は、二〇〇六年二月一九日、憲法と一体のものとして制定された教育基本法を改悪した。それについて安倍首相は「教育の目標に日本の歴史と文化を尊重することができた」と誇らしげに語り、さらに「わが国と郷土を愛し、文化と伝統を培うとともに、われわれ大人は道徳をきちんと教える責任があるのです」と述べている。この安倍の念願が今回の道徳の教科化の実現に至るわけであるが、もとは第一次安倍政権の「教育再生」政策にあった。首相直属の教育再生会議が「第二次報告（二〇〇七年六月）で「道徳の教科化」を提言し、伊吹文明相が中教審に諮問しているが、当時は、評価や検定教科書作成など問題が多く、正規の教科書に馴染まないとして実現しなかった。それを二〇一一年の大阪の中学生がいじめで自殺した事件を利用して浮上させた。第二次安倍政権が二〇一三年一月に設置した首相直属の教育再生実行会議は、わずか三回の議論で「いじめ問題等への対応について第一次提言」を出し「いじめ防止対策推進法」（二〇一六年六月制定）の制定と道徳教育の教科化が必要と主張した。これを受けて下村博文文相は中教審に諮問せず「道徳教育の充実に関する懇談会」を設置。この懇談会に貝塚秀樹ら道徳の教科化を推進者を入れ、二〇一四年二月、「道徳の教科化が必要」という報告を出した。実行会議の提言とこの報告に基づいて下村文相は道徳の教科化について中教審に諮問した。諮問に先立ち中教審の再度の反対を避けるため桜井よし子らを中教審委員に任命していた。そうして中教審道徳教育専門部会が「特別の教科道徳」として正規の教科に格上げ

するという答申を出し、答申は、道德教育は教育の中核をなす。①正規の教科として義務化する、②道德を要（かなめ）に教育活動全体で展開する、③検定教科書を導入する、④数値的ではないが教育の効果や行動面を文章で評価する、というもので、二〇一八年四月からほぼこの通りに施されている。まさに教育勅語の復活である。

振り返ってみればそれまで試案であった学習指導要領が官報に告示された法的拘束力を持つとされたのが一九五八年、その改訂に道德が導入されて六〇年、実態として道德の授業が行われることはなかった。それは現場の教師たちは勿論、世論として、道德すなわち修身の復活と拒み続けてきたからである。戦前・戦中、教育は教育勅語に基づいてなされてきた。教育勅語を具体化する修身は首位教科としてすべての教科を支配した。今、同様の戦争への道へ踏み出した。

二〇一五年三月三十一日告示の新学習指導要領は、子どもが国家・社会に役に立つ人材として身につけるものとして「学力」ではなく「資質・能力」を規定した。その育成すべき資質・能力の頂点に立つのが道德性とした。それまで指導要領は教育内容だけを決めていたが、新指導要領は指導方法・学び方・評価・学校管理を一体として国が管理することを目指している。

あらためて子どもたちに渡された道德教科書を見渡すと、今この国で目標にある「道德的諸価値について理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え自己の生き方についての考えを深める学習」をするには足りないものがある。その一つは天皇制であるが、もう一つが原発問題である。しかし六六冊のどこをみてもこのこの重い課題は出てこない。東日本大震災については、二〇一一年三月一日、福島県新地駅に停車中の列車から、無事全員避難できた二〇分の出来事（学研5）。同日、茨城県日立市における地震に続く津波に伴うボランティア活動（光文5）。東北のK市における支援活動などなど（日本文教）、などいくつかの記述があるものすべてが原子力発電事故の影響のない地域が選ばれている。おそらく「放射能はコントロールされている。東京は安全だ」と虚偽の発言をしてオリンピックを招致した政権による国策であろうか。復興五輪は棄民政策であること

が次々に明らかにになっているというのに。

教科化のきっかけになった天津市皇子山中学校は文科省の「道德教育実践研究事業」の推進指定校で文科省発行の道德副教材「心のノート」や「私たちの道德」を使って熱心に実践していた。このことから文科省流に道德を教科化してもいじめがなくなるわけではないことが分かる。いじめは続いている。

六月一日から来年度から始まる中学校道德教科書の展示会が行われている。小学校以上に付度・自粛が多かったようである。出版社ではやはり八社が参入しているが、光文社が抜けて「日本教科書株式会社」なるものが加わっている。日本教科書は日本教育再生機構の理事長八木秀次が代表で、「ヘイトスピーチ本」「嫌韓本」などを出している晋遊舎ビルにあり、事実上一体化の会社で、自己責任、自己犠牲、愛国心を強調し日本会議の求めに応じたものになっており（伊勢神宮、神嘗祭が紹介されるページがあるほか、天皇もさらりとみえる）、二二の項目ごとに四段階自己評価が求められている。また教育出版も小学校版同様偉人伝が多く日本賛美でやはり自己評価（三段階）を要求している。採択に当たっては当面教育出版と日本教科書の二社を採択しない取り組みが必要であるが、基づいているのは同じ指導要領である。ほかの六社が良い教科書ということではない。採択権を取り返す取り組み、ひいては教科化返上をめざそう。



東京オリンピック

(総監修・市川崑、一九六五年)

民族の祭典・美の祭典

(レニ・リーフエンシユタール、一九三八年)

オリンピックはどのように演出されたのか (蝙蝠)

二〇二〇東京オリンピックが、このままでは再来年に開催されることになる。各方面で衰退の速度が上がり、閉塞の状態を深めているこの「日本」社会において、「国家の威信」を表現する数少ない「チャンス」と目されているのが、天皇の代替わりから東京オリンピックへと続くイベントだ。単なる二週間のスポーツイベントに、どれほどの国家の体重がかけられようとするのか。

しかしそれでもなお、開催させられさえすれば、無償労働や「教育」現場からの動員をかけ、外形的な「華やかさ」を煽るショー政治は展開されるだろう。だから、かつて「大成功」を収めたとされている、ナチスの一九三六年ベルリンオリンピックと、一九六四年の東京オリンピックの映画を見て、開催撤回運動の準備をしてみようとおもった。

レニ・リーフエンシユタールは、戦後、「美のため」「ありのままを撮影しただけ」と一貫してナチスへの積極的な加担を否認し続けた。もちろんこれは虚偽だ。それまでになかった彼女の映像表現や演出効果をのみ取り出し、「芸術」ゆえにその責任を弁護し捨象しようとする評価は「芸術」「批評」に携わる階層にはずつとあり、彼女はこれを狡猾に利用したのだ。

しかし、その映像がかつてないほど「優れた」ものとなった背景には、どれほどの特権と、投入され続けた大量の資源があったかは、少し映像を見ていくだけでも

唾然とするほどだ。映画が最大の大衆的メディアとしてあった時代、映画産業は最高の投資効果をもたらすものだった。そしてリーフエンシユタールの映画は、多数の人間はもちろん、カメラやフィルム、移動撮影セットや自動車、大規模な照明、ひいては航空機まで、あらゆる資源を惜しみなくその映像表現に投入している。ナチスの第六回全国大会を素材とした『意志の勝利』を含めて、これほどまでに膨大な国家の特権を投入して制作された『作品』を、その「芸術性」だけで評価したいとはかけられも思えない。撮影されたものの、表現された映像以外に、どれほどの「事実」があったかについて、映画をめぐる以外にほんの少しの想像力を働かせるだけでよい。

『民族の祭典』では、冒頭に、端正なギリシャ彫刻が全裸の男性と化し、円盤投げ、やり投げを演じ、さらに裸体の女性の舞踊が演じられ、これが炎に包まれて「聖火」と変わるというみごとに象徴的なシーンがある。そして「聖火」は、その数年後にはドイツの侵略を受ける国々を走り抜けてベルリンをめざすのだ。市川崑『東京オリンピック』でも、明らかにこれをリスペクトした聖火リレーが展開されていく。「聖火リレー」自体がベルリン五輪から開始されたのだが、より、オリンピック大会そのものの「原点」が、この映画にあるということを感じ知らされる。オリンピックは、ナチスのベルリン大会、そしてこれを作品とした映画『オリンピア』二部作によって、その後のいつさいを決定づけた。

『美の祭典』の有名な冒頭もみごとだ。朝日に包まれた湖、朝露を含む蜘蛛の巣、虫、鳥たちが、朝もやの中をトレーニングする選手に重ねられてゆき、いつしか鍛え抜かれた選手の震える筋肉をありありと見せる体操競技になっていく。『民族の祭典』はメインスタジアムで機嫌よく観戦するヒトラーを数多く写し、ほぼすべて陸上競技でまとめられているが、『美の祭典』ではこれ以外の競技で構成される。その締めくくりには、高飛び込み競技をえんえんと写すのだが、あらゆる角度から空を背景にスローモーション撮影される。宙を舞うさまざまな姿態の裸の肉体が神秘的に演出され、そこに翻る各国旗がオーバラップされて「聖火」が消えていくとともに、天空から太陽の幾筋もの光が差し込むのだ。なんともはや。ドキュメンタリーというよりも、むしろアニメ的な演出効果である。

『東京オリンピック』は、作為性でこれに及ばないぶん、より「人間ドラマ」を演出しようとしたのだろう。孤独なランナーを追ったり、選手が倒れる姿や足のマメをクローズアップするシーンもある。さまざまな場面で、選手たちの表情をリアルにとらえる技術はさすがと唸らせるものはある。

しかし、映画もスポーツも、すでにこの私たちの暮らし現実の中では「崇高さ」を喪失している。とりわけ現代スポーツは、国家や利権組織・関連企業と結びつくほどにその姿を変えた。「ルール」や選手資格は大規模な大会ごとに変形していく。指導やコーチはハラスメントと同義にまで近づき、いまやスポーツは暴力を緩和する装置ではなく、暴力そのものだ。そのことをあらためて捉え直すために、リーフエンシユタールの『意志の勝利』と『オリンピア』二部作、市川崑『東京オリンピック』は、考えさせる素材に満ちているとおもう。



『私たちの街の朝鮮学校のこと知っていますか?——福岡朝鮮初級学校校長 趙星来氏のお話』

編集発行 排外主義にNO!福岡

桜井大子

このパンフレットは、排外主義NO!福岡の学習会、「福岡朝鮮初級学校校長・趙星来さんのお話を聞く」を、講演記録としてまとめたものだ。「お話」の内容は話し手・趙さんの個人史であり、同時に朝鮮学校の歴史と現在である。語り口調の記録は、読む者をジワジワと引き込んでいく。

講演は自己紹介、家族と自分自身の話から始まる。たとえば、お父さん。一九四四年に日本に渡った在日一世で、趙さんと同じ朝鮮学校の教員と校長を務め、すでに他界されている。小中高と日本の学校に通い、朝鮮語はあまり話さないというお母さんは、そのお父さん（趙さんのお祖父さん）が強制連行で炭鉱に連れてこられ、福岡で生まれ育った二世。星来さんが生まれ、朝鮮学校教員のお父さんと家族を支えるために焼き肉屋を経営されていたという。そしていま朝鮮大学で教鞭をとる弟。あるいは総連の活動家の叔父さんや、帰国したもう一人の叔父さんのこと……。

家族の紹介部分だけで、聞き手・読者はまず、趙さんの家族一人ひとりの人生が、在日朝鮮人の歴史の具体的な一つであること知る。趙さんの個人史を語る穏やかな口調は、その趙さんの家族と「日本人」の家族のありようの違いが、日本の植民地主義、侵略戦争の歴史に起因していることを知らせ、そしてそれすらを忘れ去ろうとしているこの日本社会の住人たちを、その記憶へと引き戻

す。なるほど、一人の朝鮮初級学校校長の個人史は福岡の朝鮮学校の歴史として、あるいは日本の戦争責任の問題として読み解いていくこととなるのだ。

もちろん、「朝鮮学校のあゆみ」として、福岡に限らない、敗戦後全国で展開された朝鮮学校の設立と閉鎖、そしてまた設立と閉鎖、といった歴史についても語られる。そして、なぜそうやって朝鮮学校を守っていくのかを。

趙さんは語る。敗戦直後の4・26教育闘争について、朝鮮学校創立への闘いや日本の差別政策と学校法人認可取得運動について、朝鮮学校の教育内容について。そして、財政問題。とりわけ保護者、卒業生や同胞、団体からの寄付、行事や施設貸出等による収入を主な財源とする運営は、最終的に保護者負担を大きくしていることを訴えられる。福岡県からのわずかな補助金（一校あたり三十数万?）もこの先どうなることかわからないという。すべてが、日本政府が朝鮮学校を各種学校という位置づけ以上にしない差別政策の結果である。この差別政策は補助金廃止だけの問題ではすまない。朝鮮学校を卒業しても、小中学校を卒業したとは認められないという現実がある。趙さんは「朝鮮学校をきちんと認めてください」と訴える。教育内容を詳細に語られるのも、この「認められていない」現実を超えるための正攻法の一つなのだと思います。すくまっとうな授業がなされていることを、多くの日本人は知ら

なさざるのだ。私もその一人だった。

また、「今も朝鮮学校が受けている差別」として、法的地位の低さや朝鮮渡航の困難さを例に出し、「一言で言えば朝鮮学校に戦後はまだ訪れていないといえます。戦中戦前のような扱いなのかもしれない」と結ばれる。過去に眼を閉じるといふより、過去の価値観（偏見）そのままとしか言いようのない日本社会であることは、言われなくともわかってはいるつもりだった。だけど、具体的な趙さんの言葉は胸に突き刺さる。

趙さんは、「在日一世はもう本当に残りわずかです。彼らにいい思いをさせてあげたい、このまま日本の地で亡くなるというのは本当に悔しい辛い」と、語られる。「朝鮮学校が日本に存在してはいけないという風潮を、私は大変つらく悲しく思っております。朝鮮学校が存在すると言うことは、日本にとって日本を豊かにする事だと思っております」とも。趙さんはこの学習会タイトル「私たちの街の朝鮮学校のこと知っていますか?」の「私たちの街の」が、ちゃんとつけられているところを「気に入った」と言われる。そういうことなのだ。この国がつくり出し押しつけた他者の歴史と、この社会が葬り去ろうとする歴史への無関心から、まずは抜け出さなくてはならない。ぜひ一読を!

●一部三〇〇円以上のカンパ

連絡先 092-651-4816（福岡地区合同労組気付）

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく97

米朝首脳会談を陰で支える文在寅韓国大統領



引き続き朝鮮半島情勢について考えたい。東アジア世界に生きる私たちにとって、情勢が日々変化していることが実感されるからである。しかも、差し当たっては政府レベルでの動きに注目が集まるこの事態の中に、日本政府の主体的な姿はない。見えるとしても、激変する状況への妨害者として、はっきり言えば、和解と和平の困難な道を歩もうとする者たちを押し止めようとする役割を自ら進んで果たす姿ばかりである。その意味での無念な思いも込めて、注目すべき状況が朝鮮半島では続いている。

政治家は押し並べて気まぐれだが、その点では群を抜く米朝ふたりの政治指導者の逐一の言葉に翻弄されているのは、問題の本質には行きつかない。そこで、今回のこの情勢の変化を生み出した当事者のひとりで、米朝のふたりとは逆の意味で頭ひとつ抜けていると思われる政治家、文在寅韓国大統領の言葉の検討から始めたい。

一七年五月に就任したばかりの文大統領は、直後の五月一八日に、記憶に残る演説を行なっている。光州民主化運動三七周年記念式典において、である。文大統領は、朴正熙暗殺の「危機」を肅軍クーデタで乗り越えようとした軍部が全土に非常戒厳令を布告し、ひととき抵抗運動が激しかった光州市を戒厳軍が制圧する過程で起こった八〇年五月の

事態を「不義の国家権力が国民の生命と人権を蹂躪した現代史の悲劇だった」として、自らの問題として国家の責任を問うた。一八年三月一日の「第99周年3・1節記念式」では、日本帝国主義支配下で起きた独立運動の意義を強調し、この運動によってこそ「王政と植民地を超え、私たちの先祖が民主共和国に進むことができた」と述べた。最後には、独島（竹島）と慰安婦問題に触れて、日本は「帝国主義的侵略への反省を拒んでいる」が、「加害者である日本政府が『終わった』と言ってはならない。不幸な歴史ほどその歴史を記憶し、その歴史から学ぶことだけが真の解決だ」と語った。私たちは、韓国憲法が前文で、同国が「三・一運動で建立された大韓民国臨時政府の法統」に立脚したものと規定している事実を想起すべきだろう。来年はこの三・一運動から百年目を迎える。改めて私たちの歴史認識が、避けがたくも問われるのである。

文大統領は一八年四月三日の「済州島四・三犠牲者追念日」でも追念の辞を述べた。日本帝国主義軍を武装解除した米軍政は、一九四八年に南側の単独選挙を画策したが、これに反対し武装蜂起した人びとに対する弾圧が、その後の七年間で三万人もの死者を生んだ悲劇を思い起こす行事である。今年は七〇周年の節目でもあった。文氏はここで、七〇年

前の犠牲者遺族と弾圧側の警友会の和解の意義を強調しつつ、これからの韓国は、正義にかなった保守と、正義にかなった進歩が「正義」で競争する国、公正な保守と公正な進歩が「公正」で評価される時代」になるべきだと語っている。

どの演説にあっても貫かれているのは、国家の責任で引き起こされた過去の悲劇をも、後世に生きる自らの責任で引き受ける姿勢である。私は、文氏が行なっている内政の在り方を詳らかにには知らない。韓国内に生きるひとりの人間を想定するならば、氏の政策にも批判すべき点は多々あるのだろう。だが、今や世界中を探しても容易には見つからない、しかるべき識見と歴史的展望を備えた政治家だ、とは思ふ。米クリントン政権時代の労働省長官だったロバート・ライシ氏は、文氏が「才能、知性、謙虚さ、進歩性」において類を見ない人物であり、「偏執症的なふたりの指導者、トランプと金正恩がやり合っている脆弱な時期に」文在寅大統領が介在していることの重要性を指摘している（「ハンギョレ新聞」一八年五月二七日）。「三年來の『新年辞』で南北対話と緊張緩和を呼びかけてきた金正恩氏にとっても、またとない相手と相まみえている思いだろう。

来るべき米朝会談のふたりの主役は、その内政および外交政策に批判すべき点の多い人物同士ではあるが、会談の行方をじっくりと見守りたい。この重要な政治過程にまったく関わり合いがもてない政治家に牛耳られているこの国の在り方を振り返りながら。

（六月二日記）

マスコミの
天の制 23

新元号・上皇・「二重化」されつつある権威の抗争？ —〈壊憲天皇明仁〉その21



安倍晋三政権は「式典準備委員会」による基本方針の決定という手続きで「平成天皇の代替り」のスケジュールを公表した。生前退位するのは四月三〇日、「改元」は五月一日。「平成」の終わりまであと一年ということで、マスコミはこぞって「平成」と一年のキャンペーン（「平成時代」の歴史的ふりかえり）を開始しだしている。

五月一日の『毎日新聞』の社説（「残り一年の平成時代 元号の持つ意味を考える」）は、戦後、法的根拠を失ったまま使われ続けた「昭和」。神社本庁や右翼団体の法制化の動きにおされて、一九七九年に元号法が成立した事実にならこう述べている。

「当時の社会党、共産党は、法制化が憲法の主権在民の精神に反するとしてうえて、国際化時代には元号は不便のため西暦に一本化するべきだと主張していた」。

いま、議会の中で、この〈王による時間支配〉という「主権在民」を踏みにじる「元号」に公然と反対する声は、共産党機関紙『赤旗』が西暦と併記して元号使用の開始に象徴されるように、ほぼ消滅してしまっている。どういふ民主主義感覚なのだ！ 私たち（反天連）は、いくつもの団体と協力しつつ、「新元号制定に反対する署名運動」をスタートさせている。『毎日』の社説は「昭和Xデー（改元）」をにらんだ元号法制定の時代の「世論」なるものについてこう紹介しているのだ。

「それに先立つ七九年三月の毎日新聞の世論調査

によると、『昭和』は国民生活に定着し、9割近くが元号の存続を望んでいる。元号と西暦の使用状況については「主に元号」が78%に達し、『主に西暦』の4%を圧倒した。『元号と西暦半々』は16%だった／一方、『法制化して存続させる』は21%にとどまり、『現在のように慣習として使っていく』が44%と大きく上回った」。

この「世論」なるものは、「平成改元」に向かう今、国会の状況とは反対の方向に大きく変化している。『京都新聞』（五月一日）は、こうレポートしている。「『平成』はあと一年となり、来年五月一日からの新しい元号への関心が高まる。しかし、住民票発行や転入・転出届を提出する際、生年月日を西暦で記入できる様式が、京都府内の自治体で広がっている。15市のうち、元号に限定しているのは5市だけ、担当者は『特に平成生まれの若者に西暦記入が多い』という。大学の入学願書を西暦に限るところも目立ち、昭和に比べ、元号の存在感は薄れているようだ」。

「大学の入学願書の様式を調べてみると、京都大、同志社大、立命館大、京都産業大とも西暦限定。皇室ゆかりの学習院大でさえ現在は西暦しか受け付けず、担当者は『増加する留学生に対応するため』。国際化で元号の使用頻度が低下する実態が垣間見えた」（傍線引用者）。

反民主主義のかたまり一世一代〈元号〉は、もはや不便のかたまりと化しているのだ。大きな反原発あるいは反安倍改憲の集まりを中心に、反対署名を集めていて、思いのほか反応がいい。それは、やは

りこの社会の意識の変化があるからであらう。「昭和Xデー」のときより、はるかに条件はいいのだ。『毎日』の社説にもどる。

「新たな元号への国民の関心は高まりつつある。政府は当初、切り替えの準備のために夏ごろに公表する方向だったが、来年二月以降にすることを検討している。早い時期に公表すれば、陛下の在位中に関心が新天皇に移るのではないかと懸念する自民党保守派に配慮したためだ」（傍線引用者）。

このくだりを読んで、私は「THEMIS」（二〇一七年八月）の「新天皇vs.上皇派巡る『新確執』の行方」という記事を思い出した。

「天皇が上皇になることで『侍従職』とは別に『上皇職』が新設される。いまの『東宮職』は休止状態になる一方で、秋篠宮家の活動を支える『皇嗣職』もできる。宮内庁関係者は『天皇と上皇で象徴や権威の二重化の問題は起らない』というが、宮内庁の『焼け太り』批判もある／『天皇退位後も上皇と上皇后を支える『上皇職』については、現在の侍従職と同規模の八十人体制になる。公務は新天皇に譲っても私的な活動はもっと増えることも予測されており、職員数もいままでも通り維持する。もちろん、そのための費用も必要だ。新天皇を支える侍従職を合わせた職員も増員される（皇室ジャーナリスト）／新天皇、上皇、秋篠宮と三つに分かれることで、権力の分散化。や官庁の『派閥抗争』が激化することもある考えられる。ある皇族関係者は『しばらくは新天皇派と上皇派の二重化は避けられない』と断言するのだ。皇宮警察の体制も大きく変わってくるだろう」。

新元号発表が延び延びになっているのは、二重化されつつある象徴権威の「抗争」の反映なのか。明仁天皇はもう一つの超特権的権威になるだけで、「退位」してまっとうな（人間）になるわけではない。

5月1日～5月31日

5月1日～5月31日

【5月1日】

美智子◆「御養蚕始の儀」に臨み、養蚕作業に入ったと報道。

代替わり◆明仁が退位し、徳仁が新天皇に即位するまで残り1年になったと報道。

御用掛◆明仁や皇族の和歌の相談役として、宮内庁御用掛を2007年から務めた歌人の岡井隆が4月30日付で辞職し、後任に当日付で、歌人の篠弘が採用されたと報道。

新元号◆政府が2019年5月1日の新天皇即位に伴う新元号公表時期について、19年2月下旬以降とする検討に入ったと、政府関係者が明らかに。

【5月2日】

美智子◆皇居内にある養蚕施設で、「天蚕」と呼ばれる野生種のカイコの卵を、餌となるクヌギの枝につける「山つけ」の作業をする。

【5月3日】

皇族◆徳仁、雅子、愛子が「静養」のため、東北新幹線で栃木県入り。同県内の宮内庁御料牧場に数日間滞在する予定で、JR宇都宮駅前に市民ら約千人が集まる。

秋篠宮、紀子や眞子、悠仁が当日から御料牧場に滞在。

【5月5日】

明仁、美智子◆東京都港区の東京ローンテニスクラブを「私的」に訪れ、テニス仲間らと交流。

秋篠宮一家◆栃木県の宮内庁御料牧場から帰京。

【5月6日】

皇太子一家◆栃木県の宮内庁御料牧場から帰京。

【5月8日】

明仁◆「春の叙勲」のうち、大綬章の「親授式」が皇居・宮殿「松の間」で開かれ、旭日大綬章の鎌田迪貞・元九州電力社長ら26人に勲章を手渡す。

百合子◆故三笠宮の妻百合子が、心臓のペースメーカー交換手術のため、東京都中央区の聖路加国際病院に入院。

【春の叙勲】◆安倍晋三首相が、皇居で行われた「大綬章親授式」に出席。

元号◆JR東日本の深沢祐二社長が記者会見で、2019年5月1日の新天皇即位に伴う改元を見据え、前年12月から当年3月末にかけ、回数券や定期券の表示を和暦2桁から西暦4桁に順次変更したと明らかに。

【5月9日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が6月9～11日の日程で、福島県を訪問すると発表。同県で開催される全国植樹祭の出席に合わせ、東日本大震災の被災者との面会や、津波被害を受けた同県南相馬市や相馬市などを訪問すると報道。

秋篠宮、紀子◆毎年恒例の「こどもの日」にちなんだ施設訪問として、東京都新宿

区の区立西新宿子ども園を視察。

【5月10日】

明仁◆訪日中の中国の李克強首相と皇居・御所で懇談。宮内庁によると李首相が、日中平和友好条約の締結から40年という節目に訪日したことに「両国関係の長期的、安定的な発展につなげたいと思います」と述べ、明仁が「両国の友好親善関係が増進することを希望します」。

美智子、雅子◆代替わり後、雅子が、皇居内での養蚕を美智子から引き継ぐことになったと、宮内庁関係者が明らかに。

皇太子一家の側近が4月下旬、継承に備え、美智子から養蚕の説明を受け、当月13日に皇太子一家が皇居内にある紅葉山御養蚕所を訪ね、明仁、美智子から養蚕について学ぶ予定で、美智子は長期療養中の雅子に対し「負担にならないよう、やれる範囲で」と考えているというと報道。

【海の日】◆7月第3月曜の祝日「海の日」を2021年以降、7月20日に固定する案を巡り、観光業界が反発し、日本旅行業協会の田川博己会長（JTBC会長）が記者会見し、3連休が消滅すると、旅行消費の落ち込みなどで2068億円の経済損失が出るとの試算を示す。

【5月11日】

「明治の日」◆自民党の有志議員が、憲法が公布された11月3日が明治天皇の誕生日にも当たるとして、祝日の名称を「文化の日」から「明治の日」に変更することを目指す議員連盟を発足させる。約100人が参加の意向を示しており、設

立総会に安倍晋三首相に思想信条が近い稲田朋美・元防衛相や衛藤晟一・首相補佐官らが出席。

【5月13日】

明仁、美智子、皇太子一家◆皇太子一家が、皇居にある養蚕施設「紅葉山御養蚕所」を訪れ、「明治時代」から歴代の皇后が受け継いできた養蚕について、美智子から手ほどきを受け、明仁も御養蚕所に足を運んだと報道。御所で共に昼食。

明仁、美智子◆東京都千代田区の東京国立近代美術館を訪れ、開催中の「横山大観展」を鑑賞。

【5月15日】

秋篠宮、紀子◆日本人移住150年を祝う式典出席などのため、秋篠宮、紀子が6月上旬、米ハワイを「公式訪問」することが閣議で了解される。

【5月16日】

明仁、美智子◆皇居・御所で、訪日中のサモアのツィラエバ首相夫妻と懇談。宮内庁によると、地球温暖化による海面上昇や海洋汚染が話題になり、明仁が「海はつながっているのので一国のみの対応では難しい。周辺諸国と協力する必要があるのではないか」と話したと報道。

美智子、雅子、紀子、信子、久子◆全国赤十字大会が東京都渋谷区の明治神宮会館で開かれ、日本赤十字社の名誉総裁を務める美智子をはじめ、名誉副総裁の雅子、紀子、故寛仁の妻信子、故高円宮の妻久子が出席。

美智子◆東京都新宿区の東京オペラシティコンサートホールで行われたアルゼ

ンチン出身の世界的ピアニスト、マルタ・アルゲリッチの公演を鑑賞。

【5月17日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が、「太平洋・島サミット」に出席するため訪日した太平洋の島しょ国の首脳らと皇居・宮殿の小食堂「連翠」で懇談。徳仁や紀子、眞子らが同席。サモアやパラオなど12カ国の大統領や首相らが招かれたと報道。

新元号◆政府が、2019年5月1日の新天皇即位に伴う新元号の公表時期について、同日の改元の1カ月前と想定して準備を始める方針を決める。

【5月18日】

明仁、美智子◆英王室のヘンリー王子と米女優メーガン・マルクルの結婚式が19日に行われるのに合わせ、エリザベス女王と夫フィリップへ祝電を送ったと宮内庁が発表。

彬子◆故寛仁親王の長女彬子が、客員研究員として勤務する学習院大国際センターの仕事で6月11～21日、米国に出張すると報道。

久子◆宮内庁が、故高円宮の妻久子が6月18～26日、サッカーワールドカップに出場する日本代表の試合観戦などのためロシアを訪問すると発表。

【5月19日】

秋篠宮、紀子、悠仁◆悠仁が、通っているお茶の水女子大付属小（東京都文京区）の運動会に出場。秋篠宮と紀子が応援に駆けつけたと報道。

天皇杯、皇后杯◆飯塚国際車いすテニス大会が、福岡県飯塚市の筑豊ハイッテン

スコートで行われ、男女シングルス優勝者に、障害者スポーツ大会で初めての天皇杯、皇后杯が贈られる。

【5月20日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が、徳仁、雅子や秋篠宮一家と共に、皇居内にある畑でアワや陸稲の種まきをする。中間テストを控える愛子は参加せず、徳仁、雅子は半蔵門から車で皇居に入る。秋篠宮、紀子と眞子、悠仁は乾門から車で入ったと報道。

【5月21日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子の肖像画が完成したと発表。広島市立大名誉教授で画家の野田弘志が作画を担当し、完成した絵は2メートル四方のほぼ等身大で、2014年に撮影した写真をもとに描かれ、当年3月に宮内庁に届けられたと報道。

美智子◆皇居内にある養蚕施設「紅葉山御養蚕所」で、蚕に餌の桑の葉を与える「給桑」の作業に取り組む。蚕が繭を作る「簇」の製作を行う。

徳仁◆水問題をテーマとした自身の研究活動の一環で、愛知県を日帰りで「私的」に訪れ、木曽川と長良川をつなぐ水門施設「船頭平閘門」（同県愛西市）などを視察。これに先立ち、名古屋市東区の徳川美術館を訪問。明治時代の皇室を中心とした宮廷文化を紹介する特別展を鑑賞。

【5月23日】

明仁、美智子◆皇居内の紅葉山御養蚕所で、蚕に餌の桑の葉を与えたというと報道。

徳仁◆東京・上野の東京国立博物館を訪れ、美術研究誌「国華」の創刊130周年などを記念した特別展「名作誕生―つながる日本美術」を鑑賞。

【5月24日】

明仁、美智子◆東京都港区内の映画館で、親交のあるピアニスト辻井伸行がエンディングテーマを演奏した映画「羊と鋼の森」を鑑賞。終了後、辻井ら映画関係者と懇談。

美智子◆皇居内の紅葉山御養蚕所で、わらで編んだ「簇」と呼ばれる網に、成長した蚕を移し、繭作りを促す「上簇」と呼ばれる作業に取り組む。

秋篠宮、紀子◆鹿児島市で25日に開催される「明治150年記念式典」出席などのため、羽田発の民間機で鹿児島県を訪問。

「日の君」処分◆都立学校の卒業式で君が代斉唱の際に起立せず、2009年に停職6カ月の懲戒処分を受けた元教諭の女性2人が処分の取り消しなどを求めた訴訟の判決で、東京地裁が、1人の処分を「裁量権の範囲を逸脱している」として取り消す。もう1人の処分は適法と判断。

【5月25日】

明仁◆皇居内の生物学研究所の隣にある水田で、毎年恒例の田植えをする。

徳仁、雅子◆滋賀県長浜市で開かれる第29回全国「みどりの愛護」のつどいの式典出席などのため、東海道新幹線で滋賀県入り。米原市地域包括医療福祉センターを訪れ、特別支援学校に通う生徒らがハビリに励む様子を視察。長浜市にあるヤ

ンマミュージウムを訪問。

秋篠宮、紀子◆1868年の「明治改元」から150年を記念し、鹿児島県が鹿児島市で開いた式典に出席。秋篠宮があいさつで、「明治」以降の足跡について「近代化の歩みと同時に幾度かの戦争の経験など、明暗があったことも忘れることはできない」とし、150年の節目を「日本の近代がどのような時代であったのかを学ぶ機会にすることも大切だ」と述べる。

皇室報道◆宮内庁が、眞子の結婚延期を巡り、美智子が、婚約相手への不満を周辺に漏らしている、との一部の週刊誌報道を否定する見解をホームページ上に掲載。「両陛下が宮内庁幹部や側近と、眞子さまの結婚延期について話し合ったことはない」としていると報道。

【5月26日】

徳仁、雅子◆滋賀県立長浜ドーム（長浜市）で第29回全国「みどりの愛護」のつどいの式典に出席。徳仁があいさつに立ち「豊かな緑は、地球温暖化の防止や生物多様性の保全などのさまざまな環境問題を改善するとともに、災害の防止にも大きな役割を果たしています」。2人が式典後、琵琶湖湖畔緑地でエドヒガンを植樹。地元の人形浄瑠璃の鑑賞や、関係者と懇談。

【5月27日】

彦根城博物館（彦根市）を訪れた後、JR米原駅から東海道新幹線で帰京。

【平成】

◆「昭和」から「平成」の代替わり時に、小渕恵三・官房長官が新元号の発表会見で掲げた「平成」の書がクリア

題提起で口火を切った。自民党による改憲論議のなかで、制定当時の社会状況で

は一定の効果があったと認めたうえで、現在の結婚制度への考え方、ジェンダーへの考え方の変化や多様性に、現行の憲法二四条（家族生活における個人の尊厳と両性の平等）では限界があるのではないかと指摘した。

そして、「眞子婚約問題からみる天皇制」として桜井大子が、天皇家での結婚や出産といった私的に思えることも実は公的な問題である。そして彼らの生活はその「品格」というものをお金によって保っているの、それらがことさら報道されるのである。私たちにとって結婚・出産はその行為は私的なものだが、制度は社会的公的問題だ、スキャンダルはイデオロギーなのだ、と語った

その後、参加者も混じって討論会。婚姻、家制度、戸籍制度などの問題は天皇制の問題と密接に関連がある。二四条からの批判ができればいいが、それにはまだ二四条改憲反対の側においても議論不足を感じる。私たちは、関係「ない」ではすまない制度のなかで生きている。現実の社会のさまざまな差別問題とともに考えていきたい、と締めくくった。

斎藤のレジュメの最後に「必要なのは『家』への『参画』よりも『家』からの『撤退』」という佐藤文明さんの言葉が引かれていた。この言葉をずっと反芻している。「家」「家族」という枠にとらわれない、個人としての生き方が尊重される世の中になつてほしい。今回は七月一二日（チラシ参照）。

（女天研／中村なな）

許すな！朝鮮総連への銃撃！ 跳ね返そう！ヘイトクライム

五月一九日、日本キリスト教会館において、許すな！朝鮮総連への銃撃！跳ね返そう！ヘイトクライム 五一・九講演集会が七〇人の参加で行われた。（呼びかけ・差別・排外主義に反対する連絡会、直接行動）。

講演はまず神奈川新聞デジタル編集委員で「時代の正体」取材班として川崎へのヘイト攻撃を継続して追跡取材し、記事を書き続けてきた石橋学さんから。石橋さんは川崎における最前線の取材を振り返りながら、今回の銃撃事件を単なる跳ね上がり右翼と片づけてはならないこと、明確にヘイトクライムへの踏み込みとしてその銃口は在日コリアンに向けられていると強調。特に、昨年夏に起きたアメリカのシャーロットツピルの事件でも、州知事がきちんと発言している一方で、国会議員が平然とヘイト発言、ヘイトクライムを助長させる言論人も横行する現状を批判した。

続いて、在日朝鮮人人権協会で在日コリアンへのヘイト攻撃と対決しながら人権を守る闘いに尽力されている方より問題提起がなされた。提起はヘイト攻撃の歴史過程を辿ること、その攻撃の本質と変容を明らかにするという主旨で、多くの事例を紹介。なかでも看過できないのは一九九八年に千葉朝鮮会館で起きた朝鮮総連千葉支部副委員長の殺害と放火事件である。これは迷宮入りとなったが

警察の捜査にも問題があったという。この時期はまたチマチョゴリが切られる事件が頻発した。さらに戦後間もない時期の事例でも、元日本兵による殺害事件や権力側の弾圧と差別的対応がいかに横行していたかが見えてくる。在日コリアンの人権抑圧と侵害は、朝鮮学校の無償化除外に見られるように差別排外勢力と連動していることの深刻さを説いた。

質疑討論の場では、社会学者の戸川隆浩さんがその後のアメリカの状況と、最近の右派勢力が文科省科学研究費を反日左翼教員に使わせるなど悪質なキャンペーンを開始、右派メディアも便乗している問題が提起された。

（差別・排外主義に反対する連絡会／藤田五郎）

「新たな「人間宣言」」ってなんだ？

五月二〇日、午後二時からビープルズプラン研究所で、「『平成』代替りの政治を問う」連続講座」の第五回「新たな『人間宣言』」ってなんだ？——ソモソモ天皇って、人間の、神なの」が開催された。参加者は約二三人。

この連続講座は「平成天皇制代替りの政治」のプロセスを、まず正面から緻密に批判検証する「作業を通して」「退位・新天皇即位」の政治イベントに有効に「決」するという意図で開催されている。

今回は、松井隆志さんが司会をし、鶴飼哲さんと米沢薫さんと天野恵一さんが

問題提起をするという形で行われた。

まず鶴飼さんが「第二次戦争後の世界における『人間』『国民主義と人間主義』『契約とその代補』『天皇家／制とキリスト教』の四点について話された。

次に米沢さんが、自分がプロテスタント神学を研究するに至った経緯を含め、「神にして人？キリスト教と天皇制」というテーマで「文書宗教と儀礼宗教」や「キリスト教の中心教義」「興亜賛美歌」や一九四七年神戸女学院での「天皇来院時の唱和」などについて話された。

最後に天野さんが「（神と人間）の二重構造」というテーマで話され、六〇年安保闘争は、米大統領来日阻止など、結果として天皇外交を阻止したにもかかわらず、闘争主体はそれが必要な成果であることの自覚がなかったことなどから、「（神と人間）の二重構造」が戦後の国家の装置としてある種の威力を発揮したトリックだったのではないかと述べられた。

鶴飼さんは多忙のため中座されたが、今年の四月二九日に京都で天皇制批判の集会に出席した際の「天皇制は思考停止装置」という自分の発言が、翌日の京都新聞（保守的な論調の地元紙）の見出しになったことを話され、「天皇制が論じられる時期になった」と述べられた。また、「キリスト教と天皇制の関係という視点は、今度の退位に関する議論では避けられない」とも述べられた。

発言後の質疑応答を含め講座は三時間に及び、今回は熱の入ったものとなった。

（講座運営委員会／田中）

原発労働者は団結して要求す る！ 5・26春闘集会

五月二六日、被ばく労働を考えるネットワークの主催による標記集会が、約七〇名の参加者を得て東京・文京区民センターで開催された。

最高裁上告中の労災認定請求裁判の原告・梅田隆亮さんは、危険性を教えられずに圧力容器で「拭き掃除」をしたこと、線量計を外した作業が常態化していたこ

などを話した。そして、急性被ばく症状と「原爆ぶらぶら病」に似た体調不良、苦しかった生活について、時に絞り出すように、時に叫ぶように語った。弁護士事務局長の池永修弁護士は、発病・死のリスクを負う被曝労働自体が違憲作業であること、低線量被曝の健康影響は科学的に未解明である中で不利益を労働者に押し付けており違憲である、と訴えた。

収束作業で白血病を発病したあらかぶさんは、杜撰な収束作業、下請労働者の危険手当をピンハネする会社が許せず引き上げてきたこと、東電・九電に対する損害賠償裁判にかける思いなど話した。ユニオン北九州の見口要さんは、あらかぶさんを支える会・北九州による「話を聞く会」の開催などを報告した。

全統一労働組合事務局長の佐々木史朗さんは、ベトナム人技能実習生が郡山での除染作業や川俣村での解体作業で働かされていた問題を報告した。放射線教育もなく危険手当のピンハネも問題だが、

「学習会報告」

君塚直隆『立憲君主制の現在——日本人は「象徴天皇」を維持できるか』

(新潮選書、二〇一八年)

著者は関東学院大学でイギリスの政治外交史を講じており、イギリス王室が専門で「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」では昨年三月の第十回でヒアリング。イギリスや欧州各国の君主制の事例をもとに、天皇退位後の地位と活動、呼称などについて陳述している。ちなみに、明仁には退位後も「国際親善」の役割を担ってほしい、というのが君塚の「提言」だった。

この本は冒頭で「第一次大戦後にドイツ皇帝の体制を崩壊させたからヒトラーのさばる心理的門戸をひらいた」とした当時のベヴィン英外相の発言をひく。歴史を読み解けば、戦後の「民主化」にもさまざまな可能性がありえた。それに

などを話した。そして、急性被ばく症状と「原爆ぶらぶら病」に似た体調不良、苦しかった生活について、時に絞り出すように、時に叫ぶように語った。弁護士事務局長の池永修弁護士は、発病・死のリスクを負う被曝労働自体が違憲作業であること、低線量被曝の健康影響は科学的に未解明である中で不利益を労働者に押し付けており違憲である、と訴えた。

収束作業で白血病を発病したあらかぶさんは、杜撰な収束作業、下請労働者の危険手当をピンハネする会社が許せず引き上げてきたこと、東電・九電に対する損害賠償裁判にかける思いなど話した。ユニオン北九州の見口要さんは、あらかぶさんを支える会・北九州による「話を聞く会」の開催などを報告した。

全統一労働組合事務局長の佐々木史朗さんは、ベトナム人技能実習生が郡山での除染作業や川俣村での解体作業で働かされていた問題を報告した。放射線教育もなく危険手当のピンハネも問題だが、

著者は関東学院大学でイギリスの政治外交史を講じており、イギリス王室が専門で「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」では昨年三月の第十回でヒアリング。イギリスや欧州各国の君主制の事例をもとに、天皇退位後の地位と活動、呼称などについて陳述している。ちなみに、明仁には退位後も「国際親善」の役割を担ってほしい、というのが君塚の「提言」だった。

この本は冒頭で「第一次大戦後にドイツ皇帝の体制を崩壊させたからヒトラーのさばる心理的門戸をひらいた」とした当時のベヴィン英外相の発言をひく。歴史を読み解けば、戦後の「民主化」にもさまざまな可能性がありえた。それに

著者は、そうした選択や歴史をこの本の中でいっさい捨象している。大日本帝国Ⅱ明治の天皇制についても同様だ。「日本人は『象徴天皇』を維持できるか」、もちろん結論はあらかじめ「維持

せよ」と設定されている。裕仁の「昭和」と明仁の「平成流」は「国民生活に安定」をもたらした、皇位継承問題は残るが、より「開かれた皇室」をめざそう。天皇の高い「道徳的規範」と、臣民の「寛容さと賢慮」で「国民の理解を得られること」を切に願っています」というのが、この本の結びである。

ところで、ぶっちゃけ、いまこの日本

著者は、そうした選択や歴史をこの本の中でいっさい捨象している。大日本帝国Ⅱ明治の天皇制についても同様だ。「日本人は『象徴天皇』を維持できるか」、もちろん結論はあらかじめ「維持

著者は、そうした選択や歴史をこの本の中でいっさい捨象している。大日本帝国Ⅱ明治の天皇制についても同様だ。「日本人は『象徴天皇』を維持できるか」、もちろん結論はあらかじめ「維持

著者は、そうした選択や歴史をこの本の中でいっさい捨象している。大日本帝国Ⅱ明治の天皇制についても同様だ。「日本人は『象徴天皇』を維持できるか」、もちろん結論はあらかじめ「維持

著者は、そうした選択や歴史をこの本の中でいっさい捨象している。大日本帝国Ⅱ明治の天皇制についても同様だ。「日本人は『象徴天皇』を維持できるか」、もちろん結論はあらかじめ「維持

「原発労働者関連ユニオン」の結成が呼びかけられた。

その後の質疑で、梅田さんは労組や市民運動に期待できない思いをしてきたことを率直に語った。それは、いかに原発下請労働者が労組や労働運動から疎外されてきたかを示す言葉で、それに取り組み新しい労組の必要性・重要性・緊急性が改めて確認させられることになった。

(被ばく労働を考えるネットワーク/なすび)



5月7日(月) ● 辺野古実防衛省行動

5月10日(木) ● 生前退位、何が問題か

憲法天皇「元首化」を考える! (集会の真相参照)

5月17日(木) ● 眞子、結婚、延期と憲法

24条—なぜスキャンダルになるのか(集会の真相参照)

5月19日(土) ● 許すな! 朝鮮総連への

銃撃! 跳ね返そう! ヘイトクライム(集会の真相参照)

5月20日(日) ● 「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第5回 (新たな「人間宣言」) っちゃんだ?—ソモンモ天皇って人間の神なの(集会の真相参照)

5月23日(水) ● 警視庁機動隊沖縄への派遣は違法 住民訴訟第7回口頭弁論

5月26日(土) ● 美ら海壊すな 土砂で埋めるな国会包囲行動

● 原発労働者は団結して要求する! 5・26春闘集会 (集会の真相参照)

集会情報 INFORMATION

開催中・7月末予定 ● 日本人「慰安婦」の沈黙

13時〜18時(月・火・休日休館) / W A M・女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅ほか) / 連絡先: 同館(03-3202-4333)

6月9日(土) ● 基地はいらない! 練馬駐屯地デモ

12時集合/徳丸第二公園(東武東上線東武練馬駅) / 主催: 有事立法・治安弾圧を許すな! 北部集会実行委員会

止めるぞ! 土砂搬入集会

18時30分 / 文京区民センター3A(地下鉄春日駅ほか) / 高里鈴代、垣花暁子/主催: 辺野古の海を土砂で埋めるな! 首都圏連絡会(連絡先: 090-3910-4140 一坪反戦関東ブロック)

6月15日(金)・6月16日(土) ● 第31回政教分離訴訟全国交流集会

14時 / しんらん交流館(京都市下京区諏訪町通六条) / 記念講演: 加島宏/担当: 安倍首相靖国参拝違憲訴訟・関西(fax: 06-7777-4925)

6月16日(土) ● 問い直す「1968」再考: 「叛乱の時代」を

18時30分 / 文京シビックセンター3C(地下鉄後楽園駅) / 松井隆志/主催: 研究所テオリア(03-6273-7233)

6月23日(土) ● 連続講座・安倍改憲と憲法9条 第0回「憲法9条をめぐる最新論議」

13時30分 / ピープルズ・プラン研究

所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 天野恵一、有馬保彦、白川真澄/主催: ピープルズ・プラン研究所(03-6424-5748)

6月24日(日) ● シビル連続講座 未来からの透視—ロシア革命百年 第1回

14時 / 柴中会公会堂(JR立川駅) / 太田昌国/主催: シビル(03-524-9014)

● 三十年前の天皇代替わり時の社会をふりかえる

14時 / つくば市立春日交流センター(筑波大学病院そば) / 主催: 戦時下の現在を考える講座(090-8441-1457 加藤)

6月25日(月) ● 学習会「天皇・皇后」は、なぜ人気があるのか

18時45分 / 練馬区厚生文化会館(西武池袋線ほか練馬駅) / 松井隆志/主催: アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える・練馬の会(090-5282-8803 池田)

6月26日(火) ● 明治公園オリンピック追い出しを許さない国賠訴訟第1回口頭弁論

15時30分開廷・東京地方裁判所(地下鉄霞ヶ関駅)

6月30日(土) ● 明治150年と領土問題—真実の歴史を見つめ直す—

13時15分開場/連合会館(地下鉄小川町駅ほか) / 黒田伊彦、久保井規夫、趙吉夫ほか/主催: 明治150年と竹島・独島を考える集会実行委員会(03-3329-9401 新時代社)

● 3・1 朝鮮独立運動100周年キャンペーン 日本と朝鮮半島の関係を問い直す

18時15分 / 文京シビックセンター3C(地下鉄後楽園駅ほか) / 記念講演: 趙景達/主催: 同キャンペーン(連絡先: 03-3363-7561 ピースボート)

● おしつけないで! リバティ・デモ「君が代」強制と処分をはねかえそう

18時30分 / ウィメンズプラザ視聴覚室(地下鉄表参道駅) / 澤藤統一郎/主催: 同実行委員会

7月12日(木) ● 女性と天皇制研究会・学習会

19時 / 文京区民センター3C(地下鉄春日駅ほか) / 主催: 女性と天皇制研究会(jotenken@yahoo.co.jp)

7月21日(土) ● なぜ元号はいらないのか?

13時15分 / 文京区民センター2A(地下鉄春日駅ほか) / 坂元ひろ子、中川信明ほか/主催: 元号はいらない署名運動(090-3438-0263)

7月22日(日) ● シビル連続講座 未来からの透視—ロシア革命百年 第2回

14時 / 柴中会公会堂(JR立川駅) / 太田昌国/主催: シビル(03-524-9014)

7月29日(日) ● 「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第6回 反「昭和」Xデー闘争の(経験)を通して、「平成」の代替わりを考える Part 2

13時 / ピープルズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 加藤克子、高橋寿臣、中川信明、天野恵一/主催: ピープルズ・プラン研究所(03-6424-5748)